

【連載】『凛々たる人生』

—— 志を貫いた先人の姿 ——

【第十四回】早世した幕末の英雄

小松帯刀 たてわき

東京大学名誉教授 月尾嘉男

維新十傑の一人

明治維新の余韻がまだ社会に蔓延している時期の一八八四（明治一七）年に作家の山脇之人が出版した『維新元勳十傑論』という書物がある。明治維新の実現に貢献した一〇人

を紹介する内容であり、薩摩の西郷隆盛、大久保利通、長州の木戸孝允、大村益次郎、前原一誠、広沢真臣、佐賀の江藤新平、熊本の小松帯刀、公家の岩倉具視の九名は有名であるが、もう一人、薩摩の小松帯刀という人物を紹介している。

これ以外に伊藤痴遊の『実録維新十傑』（一

小松帯刀（1835-70）



九三四）や金澤正造の『維新十傑傳』（一九四一）などが出版されており、かなりは重複する人物が選択されているが、小松帯刀を紹介しているのは前述の山脇之人の著書のみである。裏方として活躍したことで、三七歳という若年で死亡したこともあり、一般には有名ではないが、坂本龍馬以上に重要な人物であったという見解もある。この幕末から明治にかけて活躍した人物を紹介したい。

帯刀が傑出した人物であったことは以後の文章で紹介していくが、当時の二人の異国の人間の言葉が的確に表現している。イギリスの駐日公使となるE・サトウは「日本で出会った一番魅力のある人物で、家老の家柄の人間に似合わず政治の才能があり、傑出した人物である」と評価し、やはりイギリスの駐日公使で薩摩を訪問したこともあるH・パークスも「非常に知恵があり、対応の見事な人物であった」と記述している。

長崎で最新の軍事技術を習得

帯刀は一八三五（天保六）年に薩摩の喜入領主の肝付兼善の四男として鹿児島城下の喜入屋敷で誕生した。父母は次男を寵愛していたため、両親の愛情を十分に享受できなかったが、これが帯刀の自立の精神を涵養したと



図1 島津斉彬 (1809-58)

されている。一〇代前半から勉学に大変に熱心で、儒学や漢学や歌道を習得するが、生来の虚弱な体質のため病床にあることが頻繁であった。それでも武士として武術の修練もするという気概があった。

二一歳になった一八五五(安政二)年に江戸屋敷での勤務となるが、二ヶ月後には薩摩に帰国し、薩摩国吉利村領主の小松清猷の跡目養子となって家督を継承するとともに、清猷の妹である近と結婚した。本筋

に関係ないが、日本最初の新婚旅行は一八六六(慶応二)年に帯刀の世話によって坂本龍馬が新妻の龍と霧島温泉に旅行したととされているが、帯刀は一〇年前に近と新婚旅行で霧島温泉に滞在しており、こちらが日本最初である。

しかし、結婚した時期から帯刀は急速に多忙になる。一八五八(安政五)年に薩摩藩主で富国強兵や殖産興業に尽力した名君の島津斉彬(図1)が五〇歳そこそこで逝去し、養子であった島津忠義(元服してからの初名は忠徳)が藩主になると、帯刀は当番頭兼奏者番という職務に任命され、貨幣鑄造など重要な仕事を担当するが、三年後に西洋の先端技術の窓口であった長崎に出張することになり、人生が転換する。

一八六一(文久元)年一月に長崎に出張を下命され、オランダの軍艦に乗船して軍

図2 島津忠義 (1840-97)



艦の操船や電気水雷の技術などを習得し六月に帰郷する。そして藩主の忠義の面前で、長崎で習得した水雷の爆発を実演し、その功績によって翌年には忠義の実父である島津久光の御側用人に抜擢され、弱冠二七歳で藩政の改革に従事することになる。翌年には幕政改革を進行するために江戸へ出向いた久光に随行するが、その帰路で生麦事件に遭遇する。

久光が京都へ上洛する帰路、四〇〇人余の行列で武蔵国生麦村を通行していた。そこへ

イギリスの三人の男性と一人の女性が騎馬で



図3 事件当時の生麦村

行列に逆行するよう進行してきた。そこで藩士が無礼であると殺傷し、一人が死亡、二人が重傷という事件になった(図3)。この事後

処理がさらに紛争を拡大させていく。当時の外国への反感から、民衆は「流石は薩摩」と賞賛し、東海道筋の民衆は上洛する久光の行を歓迎したとされる。

幕府は金銭で結着させようと大金を支払うが、イギリスは七隻の軍艦を鹿児島湾に侵入させて薩摩とも賠償交渉をする。交渉は不調で、薩摩がイギリス艦隊を砲撃するが、イギリスが薩摩藩船を拿捕したことを契機に薩英戦争が勃発した(図4)。戦闘は三日で終了するが、結果として薩摩はイギリスに六万両余を支払って決着した。この事件を契機に藩内での攘夷の意見は下火になり、開国の方向に転換していく。

幕末の動乱時代に活躍

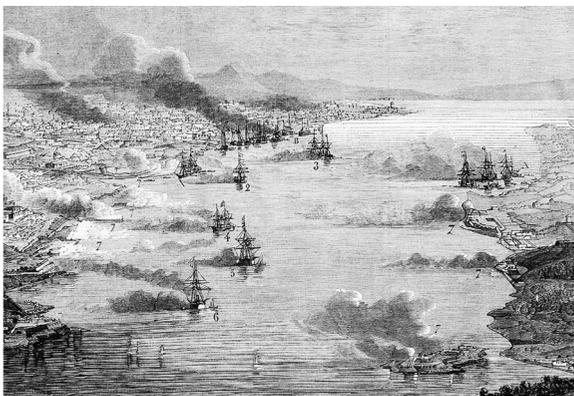
このように社会が激変する幕末に、薩摩に

されて藩政に直接関係する立場になり、さらに幕末の激動する時代に関与していくことになる。

まず一八六三(文久三)年に「八月十八日の政変」と名付けられる事変が発生する。遠因は一八五八(安政五)年に朝廷の勅許なしで大老の井伊直弼が西欧五カ国(アメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランス)と通商条約を締結した「安政五カ国条約」である。これは日本に不利な規定が数多くあったため「安政不平等条約」と批判され、「安政の大獄」や「桜田門外の変」などの事件の誘引となる。

ここで帯刀は名前からも推察できるように武士であり、一八六四(元治元)年の「八月十八日の政変」で、京都から追放されていた長州の勢力が失地回復のため会津藩主の松平容保たちの排除を目指して挙兵した「禁門の

図4 薩英戦争(1863.8.15-17)



帰藩した
帯刀は家
老に就任
し、久光
の御側詰
役に任命
されるが、
それ以外
にも、御
軍役掛、
御勝手掛、
蒸気船掛、
唐物取締
掛、御製
薬方掛な

ど数多くの役職に任命され、いかに優秀で、周囲から期待された人物であったかが理解できる。そして帯刀は家老吟味(見習)に抜擢

変」では、長州掃討の主力として奮闘した。結果は長州の敗戦となるが、京都は「大坂夏の陣」以来の戦場となり、約三万戸が焼失した。帯刀は長州が備蓄していたコメを民衆に配布するという人情を発揮している。

安政五カ国条約の不平等感や生麦事件での賠償の経験などにもかかわらず、帯刀は西洋諸国を嫌悪するのではなく、短期ではあるが長崎での経験から、外国の情報や知識が重要であることを痛感しており、長崎を拠点とするイギリスの商人T・グラバーに協力を依頼し、一八六五年に一九名の薩摩の若者をイギリスに密航させている。明治維新で活躍する寺島宗則、五代友厚、森有礼などは、この機会に留学した若者である。

さらに禁門の変では敵対していた長州とも関係を修復し、一八六五(慶応元)年には帯刀と西郷が段取りをして坂本龍馬が長州の桂

小五郎と高杉晋作と下関で会談、翌年に京都で薩長同盟が成立する。その直後に薩摩の定宿である京都伏見の寺田屋に滞在していた龍馬が伏見奉行の一隊に襲撃されて負傷した。そこで帯刀は龍馬と妻の龍とともに京都から薩摩に移動し霧島温泉に案内した。これが前半に紹介した新婚旅行の経緯である。

前述のように、鎖国時代に若者を留学のため外国に密航させたように、薩摩は海外との関係に幕末から努力してきた。一例として一八六七（慶応三）年四月から半年間、パリで開催された万国博覧会に幕府、佐賀藩とともに薩摩藩も出展している。薩摩藩は会場に独自の建物を建造して薩摩や琉球の物産を展示し、ナポレオン三世に「薩摩琉球国勲章」を授与するなど独立した国家のような行動であった（図5）。

早過ぎた逝去



図5 パリ万国博覧会の薩摩藩展示館 (1867)

明治政府は維新に貢献した薩摩の功績に配慮し、帯刀は明治天皇の東京遷都の先発を命されるが、病気を理由に辞退するとともに、

すべての明治政府での官職も辞退し、県内の原良にある別邸に移動して病氣療養に専念した。政府からは全快次第上京するように要請されるが、生来の病弱の体質も影響し、幕末の動乱に対処して衰退してきた肉体は回復せず、残念ながら一八七〇（明治三）年七月に逝去した。

帯刀は江戸時代から明治時代においてさへ早逝とされる弱冠三七歳で病没したことも影響し、現在では明治維新に貢献した幕末の志士として社会に名前が浸透していないが、当時の僚友には最大に評価されていた人物であった。一例として、京都の帯刀の屋敷に西郷隆盛、坂本龍馬、陸奥宗光、広沢真直などが参集して、維新が成功した場合の政府の人事を議論したとき、西郷の要請で龍馬が記載した人事構想の書面がある。

関白（天皇を補佐する官職）、議奏（天皇

に上奏する役目の公家）、参議（朝政に参議する役目）のそれぞれについて、龍馬が名前を列記するが、参議について最初に名前が記載されているのは西郷隆盛、桂小五郎、横井小楠、由利公正などではなく、小松帯刀であった。それ以前に薩摩において龍馬が帯刀と肝胆相照らす関係にあったことを考慮するとしても、帯刀は江戸時代から明治時代に社会が変動する時期の重要人物であったことが理解できる。

つきお よしお

一九四二年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授、総務省総務審議官などを経て東京大学名誉教授。専門は通信政策、仮想現実。趣味はカヤックとクロスカントリースキー。著書は『縮小文明の展望』『先住民族の叢智』『転換日本』『凛々たる人生』『爽快なる人生』『意志ある人生』など多数。